

マルコ伝

マルコ伝 目次

この連続講演を刊行するに際してのルドルフ・シュタイナーの序言…………… 7

第一回 (一九一二年九月一五日) …………… 10

古き時代の完結と新しき時代の始まり。ヘクトールⅡハムレット。エン・ヘドクレスⅡファウスト。

第二回 (一九一二年九月一六日) …………… 36

歴史は不可視の靈的生起が可視的現象として現われたもの。旧約聖書と福音書の構成は極めて芸術的であり、靈的な意味での劇的な迫力と盛り上がりとを持つ。

第三回 (一九一二年九月一七日) …………… 64

洗礼者ヨハネの精神科学より見た背景。洗礼の意味。エリヤの靈的本性。

エリヤーヨハネーラファエル。

第四回 (一九一二年九月一八日) …………… 100

仏陀とソクラテス。人類進化の相對する二つの流れと、そのキリスト・イエスによる統合。

第五回 (一九一二年九月一九日) 129

クリシュナの啓示。クリシュナの後継者である仏陀。キリスト・イエスの先行者である
洗礼者ヨハネ。

第六回 (一九一二年九月二〇日) 156

東洋的世界観と西洋的世界観——無時間的観照法と歴史的観照法。エリヤの魂と
十二使徒。ペテロの告白と人類進化の節目。秘儀公開を前にしての世界史的な神の独白。

第七回 (一九一二年九月二一日) 185

秘儀参入としてのゴルガタの秘蹟。キリストと十二使徒との間の魂の交流。人間の肉体
の内部へ自我の力が浸透すること。シロスのフェレキダス。エンヘドクレスの魂の呼び声。
ゴルガタから答える声が響く。

第八回 (一九一二年九月二二日) 214

ゴルガタの秘蹟の更に深い秘密。「山上」、「湖畔」、「家の内」の秘儀的意味。変容の情景。
モーゼとエリヤ。ベタニヤでの塗油。無花果の樹。

第九回	(一九一二年九月二三日)	237
	マルコ伝の内的構成の芸術性の深さ。キリスト・イエスの使命について、ゴルガタの秘蹟当時に 可能であつたはずの三種類の理解——選ばれた使徒達による理解、古代ヘブライ民族の 指導者達による理解、ローマ人達による理解。		
第十回	(一九一二年九月二四日)	265
	この人を見よ。キリストという生起に対して、人間の外的認識力は無効である。ゴルガ タの秘蹟を理解する鍵。超感覺的方法による理解を求めることの必然性。ゴルガタの秘 蹟を真に理解する道としての靈視的研究法。		
シュタイナーの『マルコ伝』について	新田 義之		301
訳者あとがき	市村 温司		305

この連続講演を刊行するに際してのルドルフ・シュタイナーの序言

アンニー・ベザントの支配の下にあった神智学協会の内部で、当時どんなことが行われていたかを御存知ない方々は、この連続講演をお読みになると、しばしば攻撃的な調子にぶつかって戸惑いされ、しかもそれが、この人物によって主唱されているキリスト解釈に対して特に激しいのに、反感を覚えらるるに違いない。なぜこのような調子が用いられたのかを理解するには、著者がこの講演によって語りかけている相手の聴衆の中には、アンニー・ベザントの影響を脱していない人々がたくさんおり、彼等に対して著者が自らのキリスト理解を弁護し、彼等を説伏する必要があつたという事情を、考慮に入れなければならない。この戦いがすでに遠い過去のものとなつてしまった現在、このような攻撃的な調子は和らげられてしかるべきだという意見をお持ちの方もあろうかと思う。しかしこの講演の刊行に携わっている人達の考えによると、講演で用いられた言葉はそのままの姿で保存すべきだということである。確かに又、ここで示されたキリスト理解が、どのような迷信に対抗して自己弁明をせざるを得なかつたのか、その迷信がどんなにヨーロッパ人のあらゆる感性に矛盾するものであつたのかは、全く興味のないことではないと思う人もあるであろう。事実を正しく観察するならば、著者

が問題としたのは、信仰団体や宗派の間によく見られる独断的教義をめぐる争いなどには関係なく、どうしても私的な興味から作り出したとしか思えない迷誤妄信に対して、著者の学問的良心に照らして守り通すべきものを明確にすることであったことが、十分に明らかとなる。この迷誤妄信はその内包する矛盾幢着によつて自らを裁いているのであり、そのことは理性ある人々の目から見て明らかであるにもかかわらず、当時の神智学協会の内部においては、著者の提出している見解に對置し得る同格のものと思なされていたのであった。現実の世界では、理性に反するものも又、ある種の役割を果たすことができるものである。

さて、著者は一九〇二年以来、ここに述べたキリスト理解の立場を明らかにしており、神智学協会の優れた会員達も初めのうちは、それに対し批判することなど全くなかったのであるが、著者がこの立場をあくまで堅持した結果は、アンニー・ベザントの指導下にある神智学協会が、ほかの数々の有難い仕打ちは別にしても、著者の示した論拠によつてベザントの迷妄に反抗したすべての会員を、協会から追放するところに着した。著者が教義争いとして構想したわけでもなく、又そのように取り扱ったわけでもない事柄に対して、神智学協会は、異端者裁判の習慣に従つて臨んだのであった。著者は事実を明らかにするため議論を行なおうとしたにすぎない。ところが、いずこにおいても見られるように、事実の正しい指摘が、個人的興味から生まれた狂信に抵触したのである。この出来事からはしかながら、神智学協会から脱退した人々が、新たに人智学協会というものを

結成するという結果が生じ、それ以来この人智学協会の会員の数は増加し続けている。神智学協会の偶像アンニー・ベザントと、偶像崇拜によつて目の見えなくなったその徒党とが、人智学協会と著者とに対しての愚にもつかない中傷を世間に拡め続けているのを見るにつけ、又、その後この神智学協会の胎内より生み出された、様々な「高貴なる人間愛」の産物を拝見するにつけ、人智学協会が神智学協会から分離したことは、決して悪いことではなかったと考えざるを得ない。又この講演の読者の中に、かつての協会分裂騒ぎに関係した人があるなら、そういう人達は、この講演の中のあるところに顔を見せている戦いの爪跡を、当時の事情からどうしてもこういう表現にならざるを得なかったものとして理解すべき、一種の記念と見るであろう。それは又、人が何かを事実にも見なされ通さねばならないと信じた時に、どのように様々な障碍に出会うものかを示す証拠とも見なされてよい。ここで述べられていることを承認せず、それが自分の信念とは無縁のものであると確信しておられる方々も、この講演が、少なくともこの講演の行なわれた時点においては、語りかけを受けた人々にとって、決して無視することの許されない意義を持つものであったことを、お認め下さる寛大さだけは、お持ちいただきたいと思う。

一九一八年　ベルリンにて

ルドルフ・シュタイナー

第一回

古き時代の完結と新しき時代の始まり。

ヘクトールⅡハムレット。エンペドクレスⅡファウスト。

マルコ伝が次の言葉で始まっていることは周知の通りである。

「これはイエス・キリストの福音の始まりである。」

現代においてマルコ伝を理解しようとする者にとつては、この最初の言葉は三つの謎を秘めているはずである。

第一の謎は「これは……始まりである」という言葉の中にある。何の始まりなのであろうか。この「始まり」はどう解したらいいものであろうか。

第二の謎は「……福音の始まり……」である。福音という言葉は人智学的見地から見て何を意味するのであろうか。

第三の謎は、私達が今まで何度か論じてきたものであるが、キリスト・イエス自身の像である。

自分自身の自我（自己の本体）を真剣に認識し、深化させようとしている者は、以下のことを銘

記しておかなくてはならない。すなわち人類は進歩発展の中に含み込まれており、それゆえに様々な事実に対する理解や、又様々な啓示は決して不変のものではなく、ある時代において完結するものとして捉えてはならない、ということである。すなわち人間の持つ理解それ自体が進歩していくものなのであり、従つて、進歩発展という言葉を真面目に受け取る者にとつては、人類の持つ深い内容のある諸事実は、進歩していく時代とともにより良く、より根本的に、より深く理解されるようになっていくはずなのである。マルコ伝にしても私達の時代になつて初めて其の理解の生じる転換期を迎えたのであり（私達はさきに述べた三つの謎を解くことでこのことを証明するであろう）、そのための準備が実にゆつくりと、しかし確実に、長い時代の推移をかけてなされてきたのであつて、その結果現在におけるマルコ伝の真の理解、つまり「福音が始まる」という言葉が何を意味するのかということの理解へと、私達は導かれてきているのだと言つてよい。

なぜそう断言できるのであろうか。それを知るためには私達は、少しばかり前の時代において人間はどんな思想で自分の感情を満たして満足していられたかを、振り返つて見さえすればいい。そうすれば、人間の理解の方法がどう変わることができたか、福音のごとき事象に関してどのように理解の方法が変わつてしまわねばならなかつたかが、分かるであろう。私達は、十九世紀の背後に横たわつてゐる過去に戻つて行くことにしよう。そうすれば、十八世紀、十七世紀とあと戻りしながら、私達は、今日の人間とは全く別の理解操作から出発した人間達の、そして彼等の靈的生活の中で、

福音書と独自の関係を持つことができた人間達の時代に、近づくことができるであろう。

十八世紀の人間は、人類の総合的發展過程を把握しようと欲した時、何等かの秘儀参入や秘教的啓示に関係せずに（秘教に関係を持った人間は実際ここ数百年間には非常に少なかったのだが）、もっぱら地上的生の中に生き、外的事実の教えてくれるものだけを受け入れるという態度を取った場合には、一体どういうことを言うことができたのであろうか。その時代の精神の最頂点に立っていた最も教養の高い知識人ですら、人類の歴史を三千年という期間しか見通せなかったと言つてよい。その内の一千年は西暦以前であり、それもすでに霧きりのようにぼんやりとしまつてゐる。あとの二千年間はキリスト教成立以後の二千年間であり、厳密に言つと（この書の刊行された一九一二年では）まだ少しそれには足りていないわけである。十八世紀人が見渡し得たのはこの三千年間であつた。彼等がこの内の最初の一千年を振り返つて見た時、彼等の目に映つたのは、神話のとばりに包まれた有史前の人類史としての古代ペルシャ人の時代であつた。この古代ペルシャ人の時代と、わずかに記憶に残る遙かなる古代エジプト人の世界とが、本来の歴史の始まりであるギリシャ時代に先行するものであると、十八世紀人には思われたのである。ギリシャ時代が、いふなれば本當の意味での、時代形成の基礎とされた。そして人間の生を洞察しようと志す者はすべて、ギリシャ時代を出発点に置いた。ギリシャ民族の太古を経てホメロス、ギリシャ悲劇作家、更には全ギリシャ詩人の手によつて今伝えられているすべてが、ギリシャの内部で生まれたのだと見なされた。その後、徐々に

ギリシヤが衰退し、外面的にはローマに征服されるのを十八世紀人は認めた。しかしながらそれは外面的な意味においてであるにすぎないとされた。なぜならローマはギリシヤを政治的に征服し得ただけであり、実際はローマはギリシヤの教養、ギリシヤの文化、ギリシヤの本質を摂取したからであった。いうなれば、ローマは政治的にギリシヤに勝利し、精神的にはギリシヤはローマに勝利したのであった。ギリシヤ精神が精神的にローマ精神を征服し、ギリシヤ精神の成果は何百という水路を通つてローマ精神の中に注ぎ込まれた。そして更にローマからその他のすべての文化の中へ流れ込み、世界全体にギリシヤ精神が流入して行つたのであるが、この過程の進行している間に、このギリシヤ的ローマ的文化の内部へキリスト教が次第次第に浸透して行き、次いで北方ゲルマン民族がギリシヤ的ローマ的文化の発展に参加する時代が来た時、このキリスト教は非常に大きな変質を経験することになるのである。このようなギリシヤ精神、ローマ精神、キリスト教精神の相互浸透をもつて、人類史の第二番目の千年間(つまりキリスト教の支配する最初の千年間)が終わりを告げるのだと十八世紀の人間は考えたのであった。

次に私達は、いかにキリスト教の支配する第二の千年間(十八世紀の人間はこれを人類文化史上の第三番目の千年と考えていたのだが)が始まったかを見てみよう。たとえ外見上はすべてが以前と何等変化のない形態で進んで行くように見えても、事態を深く観察してみると、この第三番目の千年間の中ではすべてが以前とは違った形で進行することに気づく。実例として二人の人間を採り

上げてみるだけでよい。一人は画家で一人は詩人である。彼等は西暦千年の二、三百年後にようやく歴史に登場したのであるが、キリスト教支配の二度めの千年によつて、いかに西洋文化にとつて本質的に新しいものが生じ、それがその後の時代に影響を与えることとなつたかを、この二人は実によく示している。この二人の人間とは、ジオットとダンテである。ジオットは画家であり、ダンテは詩人である。この二人は、以後に続くものすべての出発点を作つた。彼等の生み出したものは、西洋文化のそれ以後の形成力となつた。——十八世紀の人間が見渡し得たのはかくのごとき三千年であつた。

次に十九世紀がやつて来た。今日では時代文化の形成力を深く洞察しようとする人にだけしか、十九世紀になつて他の時代とは全く違つて生起せざるを得なかつたすべての事態を概観することができなくなつてゐる。人々の気持ちや感情の中にはこれらの事實はすべて潜在してゐるのであるが、今日そのことを理解することのできるのはほんのわずかの人間に限られてゐる。十八世紀の人間が見渡すことができたのはギリシャ時代までであつて、それ以前の時代は不明瞭であつた。十九世紀に起つたこと——それはほんの少数のしか理解しなかつたし、その上今日ですら一般に認められてはゐないのであるが——それは、東洋が実に強烈な奔流となつて西洋文化に流れ込んで来たといふことである。全く一種特別な様式をもつて東洋が西洋の中へ流れ込んで来たといふこの事實を、十九世紀の形成とともに出現した変化として、私達は見落としてはならない。結局のところこの東洋の

これ以降は、ご購入の上、
お読みください

みくに出版

マルコ伝

ISBN978-4-8403-0417-7 C3010

侵入こそが、時代形成の過程です。すでに徐々に西洋の中へ流れ込んで来たものと、それから以後も次第次第に強く流れ込んで来ることになる。すべてのものに、光と影を投げかけたのであって、このことを理解するには、従来の人間が持っていたのとは全く別の新しい理解力が要請されるのである。